

だれもが参画できる農業 ユニバーサル農園への挑戦

京丸園株式会社 代表取締役 鈴木 厚志

1. はじめに

京丸園は、静岡県浜松市にあります。農家の長男として生まれ1985年（20歳）に父親が経営する農園に就農。2004年、かかわる皆さまの心と身体の健康を応援する総合農園の建設を目指し『笑顔創造』を経営理念に法人化し第9期の農業生産法人です。

現在、総勢72名（役員4名、社員4名、パート64名）の組織となっています。経営の柱である水耕部では、「毎日、緑を食卓に！」をテーマに京丸園姫ねぎ・京丸園みつば・京丸園ちんげんを周年栽培し全国40市場へ出荷しています。



京丸園ちんげん水耕栽培

土耕部では、「孫に食べさせたくて！」をテーマに合鴨を利用し無農薬のお米、土地の利を生かしたごぼう等を生産しています。そして、「農を通した働きの場づくり」をテーマとした心耕部を配置し障害者雇用や研修受入れ等を行っています。

農園の特徴は、老若男女が障害を持つ者と共に働いているところです。従業員最年少は17歳、最高齢者は81歳（平均年齢43.8歳）、障害者は20名（障害者割合27.7%）、知的・身体・精神障害とさまざまですが皆元気に仕事に取り組んでいます。



出荷調整場

2. 障害者との出逢い

障害者との出逢いは18年前になります。障害を持つ子に付き添い母親が働きの場を求めて面接にやってきました。「障害を持つ方が農業現場で働くのは無理」と思い込んでいたため採用をお断りしました。それから何組もの親子が面接にやってきましたが応えは変わりませんでした。

しかし、必死に頼み込む親子の熱意に押され、採用を考え始めました。特に印象に残っているのは障害者の母親の言葉です。「給料は要りませんから働かせてください」と。どういう意味なのでしょう？

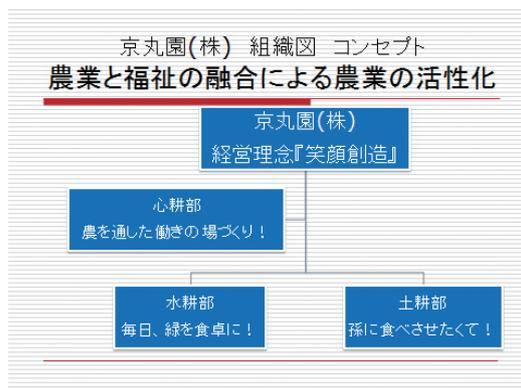
お金を稼ぐために働くと、思い込んでいた私には衝撃的な一言でした。「働く」とはどんなことなのか、本当の意味を彼らから学びました。与えられた命を世の中で生かすこと、役割を果たすことが彼らの「働く」意味だったのです。お金は、そのあとから付いてくるものでした。

しかし、近年障害者の働き場が少なくなっているのが実情です。彼らは、働き場を農業分野に期待をしています。確かに健常者に比べたら作業能力は低いかもしれませんが、働く意欲という点では、彼らの意識はとて高く実直です。

最初は、ボランティアの気持ちで一週間の研修を条件に大きな不安を持ちながら受入れを承諾しました。しかし、実際、作業場に障害者が入ると予想もしていなかったことが起こったのです。全体の作業効率が上がったのです。障害者の作業能力は健常者の半分、3分の1と言ってもいいかもしれません。そんな彼が一所懸命働くことで周りのパートさんたちが彼を助けようと力を貸してくれるようになり作業に工夫がうまれ協力体制が生まれたのです。作業場は、とても思いやりのある温かな空間となります。そして、総合力として作業が効率的に進むようになったのです。ボランティアの気持ちは吹き飛び、障害者と健常者が共に働く効果は経営として成り立つと確信し障害者をビジネスパートナーとして一年に1人ずつ採用していこうと決めました。そして、障害者が農園で働ける仕組みを作り上げればお互いにとってメリットとなると感じたのです。

3. ユニバーサル農園・心耕部という考え方

京丸園では、「障害者との出逢いをきっかけに農業に魅力を感じているさまざまな人たちが参画できる仕組みを創ること、またそれにより今までにない新たな農業の形を提案していける農園」を“ユニバーサル農園”と定義し2000年から取り組みを始めました。まずは、農園内に心耕部を設けました。コンセプトは「働く個人ごとに役割を持って、人との繋がりの中で、幸せを感じられる仕事づくりを目指す」。企業活動はすべて、人の幸せのためにありま



心耕部を軸とした京丸園組織

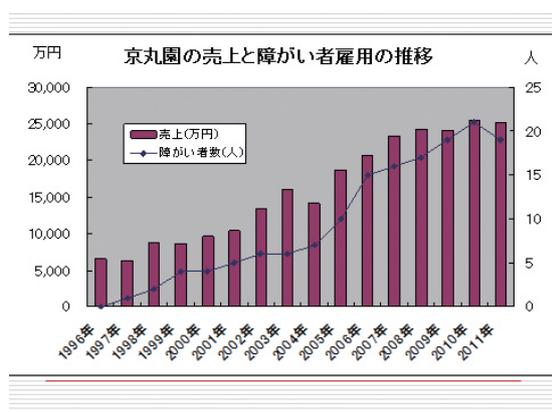
す。正直に働き、品質の良い農産物を作り、お客様から仕事の評価を頂けること、そして結果として、利益とやりがいを生み出せることが、真の社会参加となります。京丸園での働きが、かかわる人々すべての人たちの「喜びと安心と誇り」となれるような運営努力をしていきます。私たちの目指すユニバーサル農園とは、福祉のための農園ではなく、「農業経営における幸せの追求」です。障害者は、心耕部に所属し京丸園の一員として働きます。心耕部に所属すると「どんな働き方がしたいですか?」という質問からスタートします。農業現場は、多くの仕事を生み出すことが可能な職業ですから障害者の目的、希望を叶えられる農作業プログラムを作成し提案することができるのです。

4. 障害者は、負担?

(2009年日本産業カウンセラー学会発表)

障害者雇用を始めて13年が経過しました。農業界での障害者雇用はこれから必要であるとスタート時からご指導頂いてきたオリジンコーポレーション杉井保之氏より学会発表のお話を頂きました。企業にとって障害者の雇用の取り組みは直接、利益につながるものではないという認識どころか、多くの企業では負担なことと考えられているのが現状です。しかし、障害者雇用は本当に企業にとって利益をもたらさない負担なことなのか? を農園の事例をもとにまとめていただきました。障害者雇用に踏み切って以来、障害者の雇用数と売上は比例的に増し2009

年障害者数19名で全社員に占める障害者の割合は35.8%となり同時に売上は2億4千万円となり障害者雇用する前から比較すると3.7倍となっていたのです。家族経営からスタートした農園でしたが障害者雇用と共に経営規模を大きくすることができたのです。1つの農園事例ではありますが、障害者がもしも企業経営に負担であるとするなら障害者の比率が上がれば上がるほど売上が落ちていくはずでは



京丸園の売上と障害者雇用の推移 (2011年)

しかし、障害者比率が増えると同じく売上を伸ばすことができたということは決して障害者が負担ではないということを証明できたことになると思うのです。障害者雇用をすれば売上が必ず上がるとは言いませんが、可能性のあることは間違いないと言えます。特に農業分野においては多くの可能性が秘められていると実感しています。

5. 農業+福祉=健康創造産業

私たち農業者は、今まで高品質な野菜をいかにたくさん生産するかという考え一筋に農業を行ってきました。しかし、農業は農産物生産ひとつが使命ではありません。もっとほかにも農業の使命があるはずで

です。障害者との出会いの中で福祉というキーワードを知ることができました。農業生産を行いながら地域の障害者雇用を担う。また、高齢者の働き場として農業が位置づけできたなら農業は農産物を生産する現場から地域福祉を担う現場にも成り得るのです。

現在、「地産地消」という言葉が良く使われます。農産物を食べるだけの言葉にしておくにはもったいないと思うのです。労力も地元にあるものを地元で利用できるのです。そして、福祉を産業である農業が担うことができれば国の福祉予算を減らすことができローコストな国になりますし、農業が新たな産業に生まれ変わるチャンスとなります。

現在の取り組み事例をご紹介します。障害者が農場で毎日毎日お掃除をしてきていました。ハウス内はどんどん綺麗になっていきます。すると、害虫や病気が減ってきたのです。障害者の掃除のお陰で農薬の削減につながりました。ここで話は終わりません。どうせ農場をほうきで掃除して歩くのならいっそ掃除機で虫を捕獲すればよいのではと機械メーカーさんと協力し虫捕獲機を製作しました。この機械は、ゆっくり動かすことがポイントなので障害者には絶好の仕事となったのです。この機械のお陰で農薬散布がなくなりました。農薬代金、散布労力が削減されお客様には安全安心の農産物が届けら



さまざまな人が働くことができる



就労・生産農場から リハビリ機能農場へ

虫捕獲機「虫トレーラ」

れ、障害者の働きの場が創出されました。現在は、足のリハビリを行わなくてはいけない障害者がこの機械を歩行器代わりに作業をしています。

足腰がふらつく障害者が働きにやってきました。当然、安全に仕事をしていただくためには座ってできる作業を選択します。しかし、仕事を選択することによってこの障害者は、一日中座っているということになります。本来は、リハビリセンターで訓練することが望ましいのですがそうすると仕事はできなくなってしまうというのが実情なのです。



リハビリ機能付き姫ねぎウレタン切断機

そこで、私たちが開発したのがリハビリ機能付き作業機械です。それまで手作業で行っていた作業を機械でしながらその作業台に自動昇降装置を取り付けました。10分間立って仕事をしたら10分間座れるように作業台が自動で上下します。

この装置のお陰で作業者は、座り続けて仕事をすのではなく立ったり座ったり（足腰のリハビリ）を繰り返すことができるようになったのです。この機械開発のお陰でリハビリが必要な人が仕事に就くと同時に農作業も10倍速く効率的になりました。働く人にとっても、職場にとっても良い仕組みとなったのです。

ここで面白いところは、通常リハビリセンターへお金を払って治療に行っている人が、農場に来れば賃金を頂いてリハビリが行えるということです。農業が生産の場にとどまらず、障害者の就労そして、リハビリ（医療）機能農場へと変化していくことは夢ではないと思っています。これには、大学の作業療法士の先生、機械メーカ、生産者、行政が研究チームを設立し実験を行っています。近い将来、農場は医療現場になるかもしれません。

6. ユニバーサル農園の課題

これからユニバーサル農園が全国に広がっていけば、より多くの人たちが農業参画できるようになり低迷する日本農業が活性化するのではないかとこの夢を抱いています。

しかし、現状は程遠い地点にあります。今まで農業は家内産業として家族経営が基本であったため農園に雇用システムがないため研修や訓練などの受入れまでは進むのですが雇用まで進むケースは限られています。

また、今まで農業分野に就職というケースがあまりにも少なかったため就労を支援する方々が農業についての情報不足により農業分野への斡旋が行われてこなかった状況もあります。同じく、就労を希望する人たちも選択職種の中に農業がないという実態もありました。

これからは、農業情報をいろいろな分野の方々に発信することで農業の魅力を多くの方々に掘り起こしていただきたいと思います。

農家の長男が後を継ぐ農業から、だれでも参画できるユニバーサル農園が広がり多くの人々の力が集まる産業に発展させたいと思います。